

JF職員が感じたアメリカ

人種・国籍の多様性——ロサンゼルス原動力

Mike JAFFE [マイク・ジャフィ]

ジャパンファウンデーション・ロサンゼルス事務所職員

南カリフォルニアで生まれ育った者にとってのリアリティは、他地域に住むアメリカ人のそれと、かなり違っている。南カリフォルニアの気候は一年を通して快適。少し変わった性格の持ち主がいても気にする人はいない。人々の多くはあくせくすることなく気楽な生活を送っている。

南カリフォルニアには多くの人種が共存している。子どものころから多人数の友人に囲まれていた私でも、人種間の緊張関係を感じて育ったものだ。子どもなりに人種問題を認識していたのは、ロサンゼルスで自立して生活していけるように指導してくれた学校教師に負うところが大きい。

スペイン語で“Los Angeles (ロサンゼルス)”は“[City of] The Angeles (エンジェル=天使[の都市])”という意味で、そこに住む住民は“Angelino (アンジェリーノ=ロサンゼルス出身者)”と呼ばれる。街にはスペイン語があふれ、メキシコの独立記念祭のシンコ・デ・マヨ(5月5日の祝日)も祝われる。実に、ラテン系アメリカ人はロサンゼルス郡の人口の45%を占めているのである。

しかし、白人とラテン系アメリカ人が人口のすべてではない。街では世界各国からやってきた国籍の異なる人々や混血の人たちと行き交うし、家庭で英語のみを使用している世帯はロサンゼルス郡全体で45%にすぎない。

アンジェリーノとして成長した私は、アメリカ東海岸、そして日本へと移り住んでみるまで、このような状況が非常に特異だとは気づかなかった。以前、イギリスから来た友人が、ロサンゼルス街を運転しているとまるでいろいろな国を通りぬけているようだと言っていた。実際、街には各民族が集まった居住区があちこちに見られる。生活様式を共有する同じ民族グループの者が寄り集ま

るのは自然なことだろう。しかしながら、このように社会的安心感を求めてできる同じ人種の集まりと人種差別の間の違いは紙一重である。

現実には、これら両方の要因が混ざって民族地区は形成されてきた。1965年と92年にロサンゼルスで起きた暴動は、同じ場所で互いに交じり合うことなく暮らす民族グループ間の緊張が何らかのきっかけにより爆発したことで起こったのである。

しかし、こうした人種問題にもかかわらず、アンジェリーノは自分たちの持つ多様性を誇りにしている。単にさまざまなエスニックレストランや文化イベントがあるというだけでなく、この街は建築や民俗芸術、スピリチュアルな分野において、他文化からの感化を受けてきた。一風変わった異国的なものを排除するのではなく、むしろそれらを受け入れることで、ロサンゼルスは形成されてきた。

この多様性という現象が、この事実気づいているか否かにかかわらず、アンジェリーノの意識のなかに染み込み、人々を魅惑してやまないこの街の何とも言えない独特の雰囲気醸成しているのである。

(訳：金塚明子)

オルベラ街。18世紀後半、スペイン人がこの地に住んだことがロサンゼルス街の始まり。現在では、メキシコ系住民が多く住み、路上に民芸店などが並ぶ、ダウンタウンらしい活気あふれる地域だ

